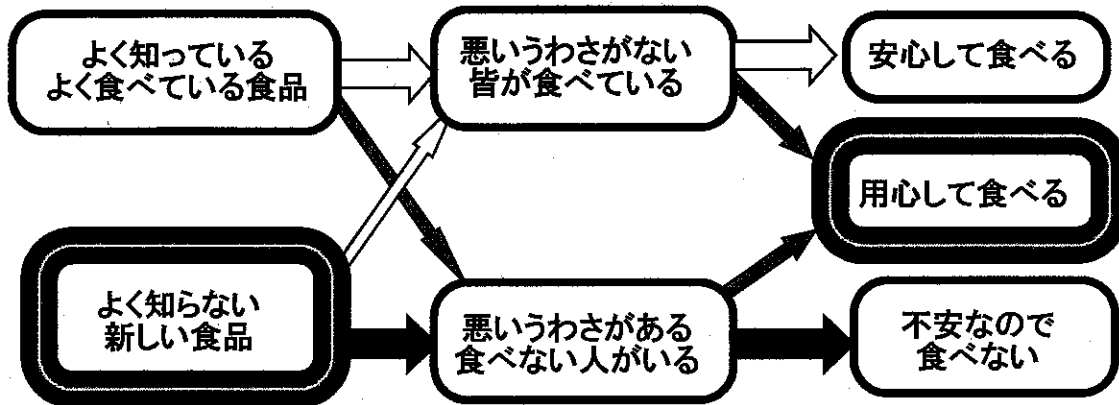


2003年9月18日唐木資料

食べても大丈夫か？ 動物に共通する生存戦略



「うわさ」の中心はマスコミ報道と学習
うわさはほとんどの場合正しいが、これが正しくないときや偏りがあるときに問題が起こる

◎ 人間の自己保存戦略(大脳辺縁系の働き)

- 1) 本能に反する行為を嫌悪する
 - ・ 他人がやらないこと (皆が食べないものは止めておく)
 - ・ 悪いうわさがあるもの (皆が嫌だというものは嫌、皆がうわさを無視するなら無視) (もちろん言語を使う学習は人間だけで、動物は態度で教え込まれる)
 - ・ 互惠・平等に反するもの (リスク受入は企業の利益になるのでは?)
 - ・ 倫理に反するもの (不正表示、クローン)
 - ・ 知らない・始めて見る・理解できないもの (遺伝子組み換え)
 - ・ 予測できないもの (タバコ対食品の重金属汚染)
- 2) うわさを信じ、うわさに頼って行動する
 - ・ いいうわさより悪いうわさを信じ、単純な解決を好む (危険をゼロにすれば安心)

◎ その結果

- ・ リスクを受け入れたくない (リスク・ベネフィットの計算などもってのほか)
- ・ 「安全な食品」も「悪いうわさ」が広がると安全と思わなくなる
- ・ ただし状況による：飢えの時には状況判断によりリスクをとる：
危険への不安と、危険を冒さなくてはならない必要性の葛藤：
辺縁系 (直感的判断) と、前頭連合野 (学習・経験による状況判断) の葛藤：
ここに解決の糸口がある

◎ 解決策=リスク・コミュニケーション(前頭連合野を活性化して辺縁系をコントロールする)

- ・ 消費者教育、食育教育を推進する
科学者が積極的に関与する (日本学術会議の活用)
リスク分析の考え方、科学的事実を分かりやすく伝える
うわさに踊らされず、真偽を確認する態度を身につける
- ・ TVや新聞は信用できる > 科学者は「大体」信用できるけれど、話が難しくてよく分からない > 役人や企業は信用できない
特にマスコミ対策を重視し、科学者のコミュニケーション能力を開発する
- ・ しかし、辺縁系と前頭連合野のバランスには個人差があるため (頭の良し悪しとは無関係)、受容可能なリスクの程度には個人差があり、万人が満足する答えはない
だから、消費者の選択の範囲を広げる (嫌な人は食べない選択) 必要がある
- ・ リスクに関連して、利便性の追求と価値観の転換の問題も考える

リスク分析の目的＝安心の確保

どのように有効なリスク評価を行い、
リスク管理を計画・実施しても、
リスク・コミュニケーションに失敗すれば
消費者の信頼を得ることができず、
リスク分析の成果はゼロである。

国際連合食糧農業機関(FAO) Carlos Eddi博士

安心の確保:消費者自らが決定に参加する
信頼できる人から情報を得る
教育を受ける(リスクの理解)

1

個別型リスク・コミュニケーション

・安心を得るために、消費者は多くの組織から異なった情報を得る
・情報の内容に違いがある場合、最も信用する情報源を探す

2

マスコミ型リスク・コミュニケーション

・消費者はマスコミ情報を信用しやすい
・しかし情報が必ずしも正しくないことがあり、その影響は大きい
・マスコミに正しい情報を提供することが重要

3

横断型リスク・コミュニケーション

すべてのStakeholderの直接の情報・意見交換会

・安心を得るためには、異なった立場を理解することが重要
・意見の対立が起こりやすいので、科学者の仲介が必要

4